

第 57 回全国高等学校軟式野球選手権大会 視察報告

上田西高等学校

軟式野球部 監督 矢澤 龍一

今回、このような形で全国高等学校軟式野球選手権大会へ派遣させていただき、関係者の皆様には大変感謝申し上げます。長野県軟式野球の更なる強化、発展、ひいては全国で勝利するというところに少しでも貢献できればと思い、このレポートを作成いたします。

【8月25日（土）明石トーカロ球場 第一試合 登別明日（北海道）対 鳥取西（東中国・鳥取）】

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
登別明日	0	2	0	0	2	0	2	0	0	6
鳥取西	0	0	3	0	0	0	0	0	0	3

鳥取西は 30 名のプラスバンド、100 名の生徒、30 名の保護者と賑やかなスタンドであった。（写真）

一方、登別明日は遠方のため、30 名弱の保護者のみ。



鳥取西・投手 右上投。直球 120km 弱、カーブ、スライダー、チェンジアップ、フォークを投げる。windアップだと制球はいま一つだが、クイックになると比較的安定する。

鳥取西・野手 よく振る。軽打はほぼなく、思い切りの良いスイングをする。ボール球を振ることはあるが、甘く入ったときには怖さがある。

登別明日・投手 右横投。直球 105km～110km ほど。カーブ、スライダーを投げる。

登別明日・野手 当てるのが上手。左打者はほぼ三遊間狙いのスイング。全打者共通してカットが上手く追い込まれてからでも勝負できる。ボールとバットの反発だけで軽打が主。

2 回表登別明日の攻撃。 四球、犠打、四球、安打で 1 死満塁とすると、振り逃げの間に 1 点。さらに安打で 1 点をあげる。

3 回裏鳥取西の攻撃。 死球、犠打、三塁打、本塁打で、一挙 3 点。本塁打の場面だが、打者がバスターの構え（2 番打者）をしていたにもかかわらず、ライトの守備位置はかなり深め。ライト線にフラフラと上がった打球をライトがダイブするも、後逸。結果的に大量失点することとなった。

開会式直後のゲームということもあり、多くの観衆がいた。正直、攻守ともに両チーム完成度はかなり低かった。四死球、失策、走塁ミス等、初歩的なミスが多く出た。それにも関わらず、拙攻で自らチャンスを潰すというような締めりのないゲームであった。3 回終了時点で、高砂市野球場へ移動した。

【8月25日（土）高砂市野球場 第一試合 専大北上（北東北・岩手）対 比叡山（近畿・滋賀）】

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計
専大北上	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	3
比叡山	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1×	4

比叡山・投手 背番号1 (4回まで)、右横投。直球110km前後、スライダー。制球難。右打者の外角直球主体の配球。だが、荒れていた。背番号10 (5回~11回)、右横投。直球110km前後、制球◎。シュート、スライダー、カーブ、ツーシームを巧みに操り、投手有利の2-1や2-0を作り、ボール球を決め球に使う理想的な投球をしていた。ランナーが出てからの間の取り方も実にうまく、自分のタイミングで投球する冷静さ、クレバーさがあった。

比叡山・野手 左打者は三遊間へのゴロ、右打者は振っていたが、頻繁にセーフティーの構えをし、投手や野手にプレッシャーをかけていた。ヘッドスピードがあるわけではないが、バント、セーフティー、たたきの精度が高い。守備においても、送球ミスもなく、球際の強さが際立った。1死満塁から投手の頭上を越えた打球をショートが捕球し、軸をぶらさず踏ん張って放った本塁送球は見事であった。ポジショニングにおいても、かなり極端であった。特に外野手であるが、センターが芝の切れ目から2~3mの位置にいたり、ライトが右中間にいたり、打者の一振りを見てポジションを変えていた。

斎藤佑樹が国体で投げた球場。
サブタイトル?がついている



専大北上・投手 背番号1 右スリークウォーター投。直球110km超。カーブ、スライダー。序盤は外角中心、緩い球を多用していたが、中盤以降、左打者には内角直球を軸に投球していた(比叡山の各左打者はラインを消すほど内角を潰していた)。ほぼ手が出ない状況であり、対応力は見事であった。

専大北上・野手 個々の能力はかなり高い。ボール回しを見ている、硬式野球と遜色ないほど鍛えられていた。下位打線も含め、ヘッドスピードがあり、2死からでも得点できる力があつた。硬式のような野球をし、出て、送って、1本出すスタイル。たたきは1本、盗塁はなし。

1回裏比叡山の攻撃。四球、犠打、三ゴで2死3塁から安打で1点。

2回表専大北上の攻撃。1死後、四球、犠打で2死2塁から安打で1点。

3回裏比叡山の攻撃。1死後、四球、たたきで2死2塁から2塁打で1点。

7回表専大北上の攻撃。四球、安打で1死1、2塁とし、次打者の二ゴでセカンドランナーが3塁オーバーランしたところ、一塁手がサードへ暴投で1点。

7回裏比叡山の攻撃。3E、犠打、セカンドゴロで2死3塁とし、打者は3番の左打者。比叡山の左打者の特徴を察知した専大は、極端なシフトを敷く。レフトはラインぎりぎり、センターは前め(芝の切れ間3mほど)の左中間、ライトは前め(同様)の右中間、ショートも三遊間を詰め、3m程しか三遊間は空いていなかった。打者はそれでも自分たちのスタイルを貫き、三遊間をゴロで抜く左前打で1点。

8回表専大北上の攻撃。2死後、安打、左越え2塁打で1点。

11回裏比叡山の攻撃。1死後、四球、四球、三前打で1死満塁とする。打席には3番打者。守備の専大は打ってくるだろうとまともに勝負に行くが、2球目にエンドランをしかけ、投前に転がる間に3塁ランナーがホームインし、サヨナラゲームとなった。

このゲームの両者は全く正反対のチームであった。専大北上は個々の能力が非常に高い。ノックやボール回しからは、長野県の高校硬式野球においてもベスト4以上に入ってきたような風格があつた。体格も良く、ヘッドスピードもある。2死走者なしからでも十分に得点でき、相手バッテリーからすれば甘い球を投げられないプレッシャーがかなりかかると思う。相手の特徴を察知する能力にも長け、ゲーム途中からバッテリーは組み立てを変更するなど、かなり完成度の高いチームとの印象を受けた。能力重視、選手重視の野球であるので、エンドラン、たたきはほとんどなく、軟式特有の動きは見られなかった。

対する**比叡山**だが、戦術が徹底させているとの印象を受けた。左打者は徹底して三遊間、右打者は状況に応じたバスター、セーフティー、たたき等をする。走塁においても、ベースのどこを踏むのか、どこで膨らめば最速でベースランニングできるのかなど、1点を取るための攻撃、1点を防ぐための守備をかなり細かく鍛えられていた。選手の身体能力はそこそこあるのだが、それよりもゲーム中に想定されるあらゆる状況に対応できるようにと練習しているのだと感じた。よって、1球1球状況が変化する、しかも全国という舞台でも冷静にプレーできたのだと。勝敗を分けたポイントであったのではないかと感じた。

【8月25日(土) 高砂市野球場 第二試合 福岡大大濠(北部九州・福岡) 対 富山第一(北信越・富山)】

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
福岡大大濠	2	0	0	0	0	0	0	1	0	3
富山第一	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1

富山第一先発オーダー

1	6	山本
2	8	杉本
3	1	塚田
4	3	小竹
5	9	野上
6	2	北隅
7	8	上野
8	7	藤井
9	4	山岸

富山第一投手・塚田 北信越と比較したら、断然調子が良かった。直球は走っており、スライダー、チェンジアップも切れていた。制球も○。気持ちも乗っており、崩すことは容易ではないと感じた。(写真：力投する塚田)

大濠・投手 右スリークウォーター。直球は110km超ほど。スライダーの切れが抜群であり、右打者アウトコースの出し入れがかなり有効であった。制球も悪くはない。



チームカラーとしては、富山第一と似ており、打って打って点数を取るスタイル。エンドランやバスター等の小技は多用しない。

1回表大濠の攻撃。先頭打者のふらふらと上がったライトフライをライトが足を滑らせ安打にしてしまう。犠打、三振で2死2塁。4番打者をなんでもない一邪飛に打ち取ったのだが、一塁手が落球。その次の球をセンターオーバー3塁打。5番打者にはライト線3塁打で2失点。

その後は締まったゲームとなる。塚田は先頭打者を出しても要所を締める投球をしていたが、2死から簡単に四死球を出すなど、三者凡退のイニングが作れなかったためなかなかリズムに乗りきれていなかった。攻撃に関しても、送りバントのサインが出ているにも関わらず、簡単にストライクを見送り、追い込まれ、強行して送れない。バスターの構えからあてにいき、力のない内野フライを打ち上げるなど、ちぐはぐであった。スライダーをかなり効果的に決められていたが、北信越の戦い方を知っている私からすれば、もったいないと思う場面が多々あった。大濠も、塚田のスライダーにはかなり手を焼いていた印象であった。ボール球を振り、チャンスをつぶす場面がいくつも見られた。

8回表大濠の攻撃。1死後、四球、7フライ、安打で2死1、2塁から右前打(ポテン)で1点。

8回裏富山第一の攻撃。1死後、中前打で1死1塁。2番打者にエンドランを仕掛ける。たたいてセカンドの頭上を越える右前打になった。1塁ランナーがサードを狙い、ライトから3塁へ送球するも暴投。1点が入り1死1塁。3番打者が中前打で1死1、3塁。二遊間が極端な前進守備を敷いたためすかさず盗塁し、1死2、3塁。

逆転するチャンスがあったとすればこの回であったが、4番一邪飛、5番三振と、チャンスを逸し、そのまま敗退した。



結果的に初回の落球が最後まで響いたことになるが、3失点すべてで一塁手、二塁手、右翼手間、ライン際の打球が安打となり、得点に絡んだ。投手としては完全に打ち取った打球であった。また、大濠高校は2死1塁から必ず2球以内にランエンドヒットを仕掛けた。富山第一は気付かなかったのか、面白いように決まっていた。大濠としては、「決まり事」になっていたのだと思う。ゲーム中に相手のパターンに気付けるか、また、そういった「決まり事」がチームに浸透しているか、重要であると感じた。

勝敗には直接関係のないことではあるが、ゲーム中のタイムの取り方について審判から注意を受けていたので報告する。まず、1点目。監督はベンチから出て直接選手に指示をしてはいけない。選手をベンチに呼びつけて指示してはいけない。2点目。ネクストにダミーの選手を入れてはいけない。3点目。この春からルール変更されたそうだが、守備側がタイムを取っている時に、攻撃側が選手を使って打者に伝令を出しても1回の攻撃タイムとして換算されない。ただし、守備側のタイムが終わってもなお伝令を出し続けている場合は、1回とみなす。

【8月26日（日）高砂市野球場 第一試合 文徳（南部九州・熊本）対 向上（南関東・神奈川）】

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
文徳	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
向上	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

ゲーム開始前、文徳高校のバットが3本ほど取り上げられていた。原因は、マークの色が赤、または2色使っていることであつたと考えられる。

向上・投手 右上投。直球は110km前後だが、ツーシーム主体で微妙に球が動いていた。緩く大きなカーブと、横のスライダーを駆使する。体全体を大きく使ってバランスの良いフォームをしていた。

文徳・投手 右上投。直球は120km超。カーブ、スライダーは制球・キレともに良く、好投手との印象を受けた。ピンチではギアを入れ替えて全力投球。実に見事で、バントをすることも難しいような投球であった。体の使い方、肘の使い方は中日の中田投手に似ていた。



1回裏向上の攻撃。安打、盗塁、犠打でいきなり1死3塁を作った。3番打者の3球目、エンドランを仕掛けるも、アウトコース高めに見事な直球を決められ、空振りでもチャンスを逸した。

2回表文徳の攻撃。2死後、死球、安打、死球で2死満塁とするも、三振でチャンスを逸した。

4回表文徳の攻撃。1死後、失策、右前打で1死1、3塁とする。向上は守備のタイムを取る。「1点勝負」と判断したようで、二遊間を極端に前進させる。当然1塁ランナーは盗塁。するとすかさず満塁策。1死満塁となったが、次打者を投手ゴロ併殺に打ち取り、ピンチを凌ぐ。

5回表文徳の攻撃。2死1、3塁のチャンスを作るも三振でものにできない。

6回表文徳の攻撃。1死後、2塁打、ワイルドピッチで1死3塁を作る。これまで文徳は強行策を講じていたこともあり、向上は無警戒で打者と勝負していたが、2球目にスクイズをあっさり決められ1点を失う。

7回裏向上の攻撃。2死後、四球で出たランナーが二盗、三盗と決め、2死3塁とするが、三邪飛に倒れる。

8回裏向上の攻撃。1死後、右2塁打で1死2塁を作る。ここでエンドランを仕掛け、右方向に痛烈なライナーが飛ぶも、右直、併殺となり、最後のチャンスを逸した。

文徳は決勝まで進むのだが、それほど良かった印象は正直残っていない。ゲーム前のシートノックを見た限りでは、これで大丈夫か？と正直思ったほどである。唯一外野手の返球が安定していて強い返球だと思ったくらいだ。捕手も他と比べると劣る（捕球→2塁2.31秒。向上高校他、好捕手との印象を受けた選手は2.03秒～2.17秒）。120km超の直球を制球よく投げ込めること、勝負どころを見極めて全力投球すること、2、3種類の変化球が自在に投げられること。このレベルの投手がいればなかなか打ち崩せない。向上は打力があるわけでないのに、狙い球を絞れない、三振、フライが多い、中には1球も振らずに帰ってくる打者もいた。全体的に工夫が見られず、あっさり終わってしまった印象を受けた。

【8月26日（日） 明石トーカロ球場 第二試合 作新学院（北関東・栃木）対 初芝富田林（大阪）】

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
作新学院	0	0	0	2	1	0	0	0	0	3
初芝富田林	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

「忘れ物を取りに来た」との主将率いる**作新学院**。プラスバンド30名を含む、総勢100名余りの応援団。

過去4度の出場で、未だ未勝利の**初芝富田林**。

記念帽子を観衆に配布したのか、地元だからか不明だが、バックネット裏まで初富の帽子を被る観衆が多くいた。（右写真）



作新・投手

右横投。直球は120km超。スライダー、カーブ、チェンジアップ、フォークを駆使し、ストライク先行の小気味良い投球であった。（左写真）



初富・投手

背番号7。右上投。110km～115kmほど。スライダー、カーブを投げるがそこまで切れは良くない。しかし、変化球のコントロールは良く簡単にストライクが取れるため、コントロールミスがなければ大量失点はしにくいと考えていたが、直球の制球がいまいちで、しかも内角を多く突いていたので死球が多かった。

2回表作新の攻撃。1死後、2死球でチャンスをもろうが三振でものにならず。

3回表作新の攻撃。四球、盗塁、犠打で1死3塁とする。3球目にエンドランを仕掛けるも空振りで見逃し。

4回表作新の攻撃。死球、犠打、中前（盗塁）で1死2、3塁から中前打で3塁ランナー生還。2塁ランナーは本塁タッチアウト。2死1塁から四球、盗塁、ワイルドピッチで1点。

5回表作新の攻撃。2四球で2死2、3塁から、パスボールで1点。

その後も作新は毎回のように得点圏にランナーを進めたが得点できず。一方の初富はチャンスらしいチャンスを作れず。唯一あったといえ、**6回裏**。四球、犠打、内野ゴロで2死3塁とし、パスボールの間に本塁を狙ったが、キャッチャーの素早い処理で3塁ランナーがアウト。1安打完封で敗退した。初富も個々の能力がないわけではない。作新のほうが全体的に少し上回っていた。球際の強さ、俊敏性、ヘッドスピード、打球への反応等。しかし初富は自分たちのスタイルを崩そうとしなかった。「自分たちの野球」を貫くことも大切だが、格上の相手に対しては自分たちのスタイルを崩すこと、工夫すること、揺さぶることも必要である。戦い方によってはもっと接戦に、作新を苦しめられたと考えるともったいなく感じた。

1回戦4試合を観させていただいたが、やはり大切なことは基本であるをつくづく感じた。全国大会レベルのゲームであっても、勝敗を分けるのは「ミス」である。失点の95%以上に四死球が絡んでいると思うし、四死球に失策が絡んだら100%失点するのではないか。それらのミスは「自らのミス」であり、防ぐことができるミスである。ミスさえなければどのレベルのどんな高校相手であってもある程度の試合ができると感じる。ストライクを自在にとれ、決め球になる変化球、カウントを取れる変化球がある投手。普通のゴロをさばける内野手。普通のフライが捕れ、カットまで返球できる外野手。ゴロの打てる打者。四死球を100%なくし、エラーを100%なくし、ミス全般を100%なくすことが、勝利への近道であると強く思う。

今回富山第一が敗れたことにより、北信越代表校は5年連続で初戦敗退となった。そこまで全国との力の差があるとは感じなかったが、この事実を受け止めなければならぬ。県全体、北信越地区一丸となって全国で勝てるチーム作りをしなければならない。今回私は神奈川県の高校の監督・部長と同行させていただいた。県勢代表を応援するために神奈川から駆けつけ、北関東代表・作新学院が敗れるまで明石に滞在していたそうだ。神奈川から全国で勝てるチームを出そうと取り組みをしても、なかなか勝てないのが現状である。全国と勝負するために、長野県全体で手を組んで全体の底上げが必要であると感じる。なにかを変えなくてはいけない。硬式野球部に比べ、加盟校の数も限られている軟式野球部会では、組織で動こうと思えば比較的容易である。まずは、それぞれの学校現場で根気よくご指導いただき、全国で勝てるチーム作りへ、妥協することなく追及して取り組んでいきたいと思う。